

現在の仙台市民に災害の記憶を問えば、殆どの人々が東日本大震災のことに言及するに違いありません。しかしながら 80 代の同窓生の皆さんとお話していると、しばしば仙台空襲で体験した焼夷弾の恐怖と燃え上がる炎のなかを必死になって逃げ惑った思い出を、まるで昨日のこのように生き生きと語りだす方々がおられます。

事実、昨秋、私の手元に一冊の文集が送られてきました。その表紙には『子供の時 戦争があったー73 年の時を超え、80 歳を過ぎた私達が…宮城学院中学校昭和 24 年入学生・有志』と記されていました。1949（昭和 24）年に宮城学院中学校に入学した有志 37 名の方々が、小学校 3 年生の時に体験した仙台空襲の記憶を文集にしてまとめたものでした。「建学の精神」で「人類の福祉と世界の平和に貢献する女性を育成する」と謳われているように、このような企てをすることが、いかにも宮城学院の同窓生らしいと感銘を覚えさせられたことです。

発起人の中心になって文集作成の労を取られた佐々木孝子さんは「今、私達は 80 歳を超えました。あと、どれだけの時間が残っているのでしょうか。多分、私達の年齢が第 2 次世界大戦を体験し、覚えている最後の年齢ではないでしょうか。そんな私達が、あの悲惨な戦争体験を後世に伝える義務があると考えます。微力な私達ですが、未来の子供たちに戦争の恐ろしさと平和の尊さを、私達の実体験として残しておきたいと考えるのです」とその思いを綴っておられました。

また 7 月 5 日～14 日まで仙台市戦災復興記念館で戦災復興展が開催されました。今回の展示では「宮城学院の戦争被害」というコーナーが設けられ、人間文化学科教授の大平聡先生が、学芸課程の学生有志たちと共にその展示に大いに協力されました。

目玉と言えるのは、1903 年に建設された第一校舎の礎石に埋め込まれていた銅製の定礎箱とその中身が紹介されたことでしょうか。この定礎箱は、焼け跡のなかから奇跡的に回収され資料室倉庫に保管されていたものです。長いこと存在が忘れられていたものですが、大平先生が灰燼に帰す一歩手前の収蔵品を可能な限り復元保存処理してくださったものです。戦火を潜り抜け、今にも崩れてしまいそうなぼろぼろに焼けただれた聖書、讚美歌、合衆国改革派教会海外伝道局機関誌、定礎日の新聞などを通して、その夜の炎と熱と阿鼻叫喚の光景がまざまざと甦ってくるような思いに囚われたことです。あらためてこれらの貴重な史料を学内でも展示し、生徒、学生の皆さんにも見ていただく機会を設けたいと願うものです。

戦後 74 年、人間の記憶が時の経過と共に風化していくことは否めないのかもしれませんが。しかし旧約の民は出エジプトの救済の出来事を決して忘れることなく常に新たに想起し続けました。そればかりでなく紀元前 583 年、新バビロニア帝国によって祖国（南王国ユダ）が完膚なきまでに滅ぼし尽くされた苦難と悲しみの歴史さえも、イロハ歌の『哀歌』として心に刻み続けたのです。その 3 章 19 節～21 節には「苦汁と欠乏の中で／貧しくなったときのことを／決して忘れず、覚えているからこそ／わたしの魂は沈み込んでいても／再び心を励まし、なお待ち望む」と記されています。

中村草田男は「降る雪や明治は遠くなりにはけり」と詠みましたが、その伝で言えば「灼くる陽や敗戦遠くなりにはけり」と詠嘆したくなるのが日本人的な心性と言えるでしょう。しかしそのような抒情性に身を委ねることに抗して戦争の惨禍を「決して忘れず、覚えている」ことは大切なことではないでしょうか。あらためてリヒアルト・ヴァイツゼッカー西ドイツ大統領の次のような言葉を心に留めたいと思うのです。「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在に対しても盲目となります。非人間的なことを心に刻もうとしない者は、再びそのような危険に陥りやすいのです。」